ジャケット撮影のときに着た革ジャンを、衣装バッグの上にきちんとたたんで置いた。メイク道具も確認した。MCのアンチョコもパケットにしまった。

(準備はOK。大丈夫……と)

1992年4月。有希は翌日に迫った目黒鹿鳴館での初ライブのしたくを整えていた。

東京でちゃんとしたライブをやるのは、はじめてだった。しかも、見に来る客の大半がジャクソン・ジョーカーの“ラディー”恩田が目当てなのはわかっていた。いくら大丈夫だと自分に言い聞かせても、のしかかってくるプレッシャーは大きかった。

「有希ちゃんはへんに慣れてないところが魅力なんだから、気負わなくて全然いいんだよ」

そう恩田は言った。

「卑屈になるんじゃなくて、みんな恩ちゃんを見に来てるんだって、気ラクにかまえておけばいいんじゃない?」

当時、まだサポート・メンバーだった五十嵐公太もアドバイスしてくれた。が、そう簡単にプレッシャーははずれない。

こんなときは、いや、こんなときだから、彼に抱きしめてほしかった。いつものように「大丈夫だよ」と言ってほしかった。けれども、その日の彼はむっつりと黙りこくったまま、有希のライブのことなど眼中にないような顔で、寝ころんでテレビを見ているだけだった。

心当たりがなくはなかった。先に上京したにもかかわらず、彼のバンドはあまり進展がなかった。それにひきかえ、有希のほうは着々とインディーズでCDを出し、ライブをやり、順調に進んでいた。

JUDY AND MARYでやることをすすめてくれたのは彼だった。恩田のソロ・プロジェクトとして始まり、先も見えないバンドを続けることにやや決心が鈍っていた有希の背中を、彼は押してくれた。「俺は有希の詞が好きだから、有希が詞を書いてやっていけばいいと思う。それに恩田さんとやれば悪いようにはならないと思うよ」

自分のバンドとは音楽性も目指す方向も違うバンドを有希がやることを、彼はそう言って賛成してくれたのだった。

とはいえ、あまりにも速いスピードでJUDY AND MARYが成長していくにしたがって、彼の中にあせりの気持ちが芽生えないはずなかった。

(がんばろう)

寝ころんだままの彼の背中を見ながら、有希はひとり、心の中でつぶやいた。

それはまるで海鳴りのようだった。

「ひっこめ!」

「ブス!」

「ヘタクソ!」

ステージに立っている間、ジャクソン・ジョーカーのファンの女の子たちの、そんな野次がひっきりなしに飛んでいた。もしも冷静だったなら、ショックで歌えなくなっていたかもしれない。だが、そのとき有希の頭には、きちんと歌う、そのことしかなかった。怒号も嬌声も、有希には雑音にしか感じられなかった。それよりも、わずか30分の短いライブの間に何度も味わったエクスタシーが、有希には忘れられなかった。バンドの音に自分の体が交わるような、奇妙で甘美なあの興奮。あれはいったいなんだったのだろう。あれをもっと味わいたい。できることなら何度も何度も。

かちん、と何かが心の中で音を立てた。それは小さなかけらのようなもので、生まれたときからずっとずっと探してきたもののような気がした。

運命という道が急に広がって、その上を自分がすべりだしたのが、そのとき有希にははっきりとわかった。

展開は予想以上に早かった。ジャクソン・ジョーカーは解散し、デモテープとライブビデオをさまざまなレコード会社や事務所に送ったJUDY AND MARYは、あっけないほどの早さでEPIC SONYからメジャー・デビューが決まった。

まさか、という気持ちと、やっぱり、という気持ちが有希の中で交差した。頭ではいくらなんでもメジャー・デビューなど簡単にできるわけがないと思う半面、胸の奥でこうなることを強く確信していたような気がした。プロとしてバンドをやってきた恩田でさえ、半信半疑の表情で「信じらない」という言葉を何度も口にするその横で、有希はそれを平然と受けとめていた。

アルバムのレコーディングが始まった。それと同時に、テレビ番組『eZ a GO! GO!』の司会に抜擢された。スタッフとの打ち合わせもあれば、雑誌の取材もあって、デビューもまだだというのにスケジュールはびっしり埋めつくされた。破格の新人バンドとして期待をかけられたJUDY AND MARYは、例を見ない華やかなスタートを切った。それは周囲の雰囲気からひしひし伝わってきた。当然のことながら、有希はそれに精いっぱい応えたいと思った。

眠らなかった。食べなかった。

だが、やっとふみ入れた音楽の世界で巻き起こる日々の出来事に熱中するにつれ、彼との関係はどんどんぎくしゃくしてきていた。もはや修復のしようがないところにふたりは来ていた。

夜遅くアパートのドアを開けて、有希が「ただいま」を言う。彼が「おかえり」を言う。お互いに、「今日は何してた?」と質問するのはタブーで、それでつい函館時代の昔話をしたりする。20歳そこそこのふたりが老夫婦のように過去を懐かしむなど、何が悲しくて……と、それぞれに暗くなる。

いちばんなんでも話して、なんでも理解されたい人に、言えないことがある。そうなったら、すでに終わっているのと同じだった。有希にしても、彼にしても、2度目の別れがすぐそこに迫っているのを、いつしか暗黙のうちに了解していた。ただし、今度の別れは本当の別れだ。

「ごめんね。もう一緒に暮らせない」

切り出したのは、有希だった。

ひとりぼっちのこの街で

ひっそりと息をしている

上等な青空うらはらに

まるで死んだ小鳥のようよ……

ときめく胸が痛むから

遠い遠いあの街で

かぞえきれないKISSをおくってよ……

明日世界が終わっても

歌い続けてみせるから

あきらめきれない夢を

かなえてよ My Darling

デビュー曲「POWER OF LOVE」のレコーディングでは、喉が痛くなるまで歌わされた。何度も歌詞の書き直しが出た。緊張で胸が痛かった。

でも、いちばん痛かったのは、忘れるには記憶が新しすぎる人への思いがそこにつまっていたからだった。